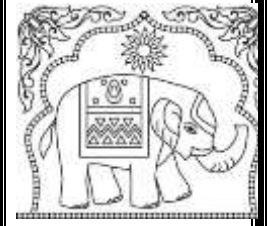


まいとりに मैत्री

No.14 平成 23 年度 秋号 -2011. 10. 19-
東洋大学仏教青年会・東洋大学仏教会発行機関誌



< मैत्री > :maitri (マイトリー) とは、慈しみ、友情、思いやりを意味する古代インドのサンスクリット語です。

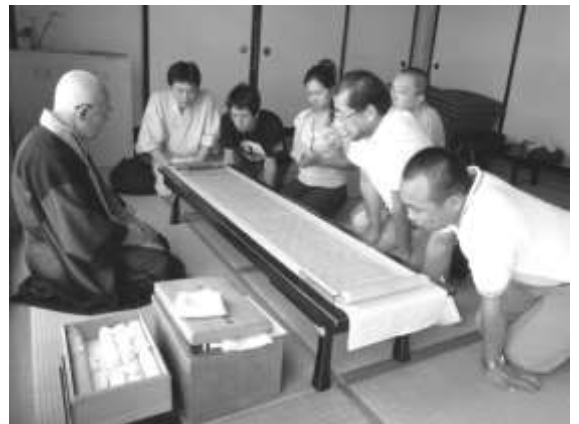
仏教では慈 (いつくしみ)・悲 (あわれみ)・喜 (よろこび)・捨 (とらわれない心) という四つの広大な利他の心 (四無量心) の一つです。

平成 23 年度東洋大仏青・仏教会の研修旅行—会津・喜多方、寺めぐり

9 月 17 日 (土) から 18 日 (日) にかけて、黄金色の稲穂が広がる会津盆地を 2 台のレンタカーで西へ東へと駆け抜け、会津、喜多方の寺院・神社をめぐり一泊二日の研修旅行に行ってきた。

一日目は、如法寺の鳥追観音と恵隆寺の立木観音、弘安寺の中田観音の「会津ころり三観音」をめぐった。三観音を巡礼すれば、老若男女平等にご利益が「ころり」と授けられ、恵隆寺堂内の「だきつき柱」を抱き心願すれば、死の床にあっても穏やかで家族を煩わせることもないという。いずれの古刹もこの地方の人々の素朴な信仰を集めている。この日は日本三大虚空蔵尊のひとつ、円蔵寺の福満虚空蔵菩薩も拝観した。十二支の丑寅の守り本尊であるので、狛犬ならぬ牛と虎が一對になり境内に据え置かれていた。ここは民芸品で知られる赤べこの発祥の地でもあるそうだ。宿泊地は裏磐梯休暇村である。星空を楽しみにしていたが曇り空で見えず残念だった。

二日目は休暇村に程近い五色沼を散策し、新宮熊野神社を拝観し、喜多方ラーメンの隠れた名店で昼食の後、この日一番の目的である平安時代後期の代表的な莊嚴經「国宝一字蓮台法華経 開結共九卷」を拝観させていただくため天台宗寺院龍興寺に向かった。お寺の一室でご住職に経巻を開いていただくと、斐紙に銀泥の界線が引かれ、白、紅、青、金等の五彩の蓮台とその上に一字一字書かれている端正な文字に眼が奪われる。八百有余年前、女性を含む三十名が一字一仏の祈りをもって書写したもので、和様の書風と蓮台との調和が美しい。一行十七字詰めに墨書されており、上から全体を見ると蓮台の色目が菱形や斜め雁行、横平行になっていることがわかる。全十巻の内一巻は失われているが、お寺が中世以来数度の火災に遭いながら、長い年月、篤く護持されており、また国宝の文化遺産を守られていることに敬意を表したい。ご住職には貴重な宝物を間近に拝観させていただきお話をうかがったこと、有意義な研修となったことに心から感謝を申し上げたい。



針貝京子(インド哲学科 2 部 2 年)

【目次】

会津・喜多方、寺巡り	……1	コラム「仏教と日本文化」⑫	……5
印仏学会のぞき見	……2	会員だより	……7
語学勉強会報告	……3	書籍・イベント情報	……9
タイの仏教事情	……4	今後の予定	……10

《印仏学会のぞき見》

9月7日・8日に龍谷大学大宮学舎において日本印度学仏教学会学術大会が盛大に催されました。今回は大会に参加した仏青会員の鮫島有理さんと鈴木伸幸さんにその報告をしていただくことになりました。

～印仏学会に参加して～

2011年9月7日（水）、8日（木）に龍谷大学（京都）にて日本印度学仏教学会（以下、印仏学会）の第62回学術大会が行われた。

学術大会の発表は、専門や分野により10の部会にわかれている。部会ごとに教室が分かれており、同時並行的に一人20分程度の持ち時間で各発表が進行していく。そのため参加者は、自分の聞きたい発表がある教室に移動しながら発表を聞くこととなる。部会の分野は、インド学系の部会が1つで、残りは仏教学系の部会であった。

プログラムは、7日は午前、午後ともに発表、8日は午前中が発表で、午後はパネル発表となっていた。パネル発表はテーマ毎に行われ、今年は6つのパネルが実施された。パネル発表はパネリスト5名前後のシンポジウム形式の発表で、これも先の発表同様、各教室で行われ、聞きたいテーマの教室に行く、という形式である。

私は今年初めて印仏学会に参加したが、元々仏教学系の出身ではないので、最初はこの「パネル発表」というものが何をするのかわからなかった。医学、心理学系の学会では「パネル発表」というものはなく、「ポスター発表」というものがあるため、はじめはこの発表と混同していた。蛇足ながら、「ポスター発表」を説明すると、畳1畳位の板状のものを立てた所に、自分が発表する紙を貼り付けて説明する形式の発表である。文化祭などで模造紙を貼り付けて掲示した記憶がある方もいらっしゃると思うが、おおよそそのようなものだと考えていただけたらよい。一口に学会といっても、専門の学問によって発表の形式や雰囲気も全然違うことを実感した大会であった。

東洋大学からは伊吹敦先生、オーダムさん（博士後期課程）、澤田容子さん（博士後期課程）、曾清満さん（博士後期課程）らが発表されていた。オーダムさんは「モンゴル語訳『八千頌般若経』の系統について」と題した発表であった。インドで成立し、ネパール、チベットを経てモンゴルに伝わったとされ、広く流布している『八千頌般若経』のモンゴル語訳の系統を明らかにするという根気のいる、地道で、かつ文献学上意義のある研究を発表されていた。

2日間にわたり行われた学術大会であったが、自分の興味関心のある発表やあまり関心のなかったテーマを含め、色々と聞かせていただいた。自分の興味と近い発表、今後研究に参考になると思われる発表、専門的すぎて睡眠学習してしまった発表、「こういう風に発表するとわかりやすいんだ」と勉強になった発表、「これはやってはいけない…」と反面教師になった発表等々…実りの多い大会であった。

来年は、鶴見大学（川崎）で行われるとのことである。日帰りで行ける方も多いと思うので、参加されたことのない方はぜひ参加されてみてはいかがだろうか。各人がその興味に応じて実りある時間を過ごせること必至である。

鮫島有理（大学院仏教学専攻修士課程1年）

～印仏学会で思うこと～

印仏学会に足を運ぶのは昨年度に引き続き二回目になる。私の親友が京都の大学で哲学を学んでおり、その親友を頼って龍谷大学大宮学舎を訪れることになった。私たちが足を踏み入れたのは学会二日目の9月8日である。学会も二日目となると大学院生の緊張感みなぎる発表はほぼ終了し、研究職の方々の発表がほとんどであった。そのためか大学は和やかな雰囲気に包まれているように思われた。

毎年恒例、印仏学会の最後の華を飾るのが各分野の碩学によるパネル発表である。今年は7つのパネル発表があり、なかでも私が関心を持ったものは3つほどある。渡辺章悟先生の『『般若心経』研究の現在』、竹村牧男先生の「仏性思想の東アジア的展開」、田中ケネス先生の「アメリカにおける仏教と心理学・心理療法の遭遇—仏教の新しい役割」である。どれも私の関心のあるテーマであり、体が3つほしいと思ったものだ。心惜しさは残るものの、かねてから興味があった『般若心経』のパネルを拝聴することにした。渡辺先生が2008年に出版された『般若心経—テキスト・思想・文化』を拝読して、『般若心経』の奥深さに関心を持つようになり、是非ともパネルを聞きたいと思ったのである。さすが『般若心経』は日本人に最も親しみ深い經典であるためか、500人は軽く収容できる大教室も空席が目立たないほど多くの人々が詰めかけていた。『般若心経』への関心がいかに高いかが伺われる。パネリストは大正大学の米澤嘉康先生、高野山大学大学院修了の原田和宗先生、東京大学の齋藤明先生、身延山大学の望月海慧先生、駒沢大学の吉村誠先生の5人で、司会は渡辺章悟先生である。学説の対立もあり、刺激的な議論が繰り広げられた。パネル全体の発表を通して、『般若心経』の成立からその思想、東アジアでの展開まで、最先端の議論に触れることができたことは大きな喜びである。『般若心経』がいかにして人々に求められ展開してきたのか、そのたどってきた歴史に思いを馳せると、一層『般若心経』に対する思いが強くなったように思える。



また、今回の学会全体を通して学問としての仏教を意識することになった。学会における仏教学の議論はたいていテキストクリティークの話題から始まる。仏教学という学問がいかに方法論にこだわるかということをしみじみと感じたものである。近代の西洋で生まれた文献学の伝統が仏教学のなかに生きているとは驚きだ。そして仏教に関する知識を蓄えるのみならず、サンスクリット語やチベット語、漢文といった一次資料を正確に読み解く力を磨いていきたいと切に思った。学会終了後、文献学をめぐって親友と議論を深めた。思えば、かのニーチェも若かりし日は文献学に明け暮れた。彼の独創的で深遠な思想も過去の文献の正確な読みによるところが大きいに違いない。だから、テキストの正確な読解は必ず未来への創造につながるものであるのだろう。

鈴木伸幸（インド哲学科3年）

《語学勉強会報告》 ～仏教漢文講読会～

漢文仏典講読会は橘川智昭先生による、漢文で書かれた仏教經典を読み進めていく勉強会です。仏教經典は漢文の他にサンスクリット語やパーリ語、チベット語で書かれたものなどがあり、それぞれの言語で書かれた經典の読解には、その独特の文字や文法、語法に関する専門的知識が必要です。しかし、漢文經典は私たちが普段目にする漢字で書かれており、少し慣れるだけで文章を読めるようになります。

仏教学、とりわけ大乘仏教を専門に勉強していく学生の方にとって漢文は避けて通れない重要な分野です。一般的に語学の習得には継続して勉強し続けることが重要であり、また独学よりも専門家の教えを受けた方が学習の速度が上がります。

また、仏教やその思想などに興味のある方が仏教思想に触れる場合、漢文そのものに慣れておく事はとてもよい事です。何故ならば、日本語で書かれた經典はなく、日本語に訳されたものはほとんどが漢文經

典なので、訳される以前の原典に書かれている事をありのままに読みたい時に重宝するからです。

これまでの勉強会で扱ってきた『法華経』は、古くから諸経の王と呼ばれ親しまれてきた經典ですが、比較的平易な文体で書かれ、分かりやすい比喻がふんだんに使われているため、漢文が苦手な方や仏教に詳しくない方でも楽しく勉強していただけます。主催者の橘川先生は大変優しい方で、私たち生徒に対して根気強く、誠意をもって対応くださる先生です。簡単なことや以前に教わったことなどを質問しても、その都度優しく教えて下さいます。また、この



勉強会の受講生は比較的年長の方が多いため、他の学部生向けの勉強会と比べて進度が緩やかな事も特徴の一つです。人生の先輩方からいろいろなお話を伺うよい機会でもあります。

漢文仏典講読会と聞くと多くの方が、漢字ばかりで大変そうだな、お経なんて難しそうだなと思う事でしょうが、その様な事はありません。ぜひのぞいてみて下さい。

住友高作（インド哲学科2年）

《タイの仏教事情⑧》

～タイ仏教教育の歴史と現状（5）～

これまで、4回の記事を通してタイの仏教教理教育、パーリ語教育とその国家試験について紹介しましたが、今号からはタイの仏教大学の歴史とその現状について触れてみたいと思います。

タイには、仏教大学と名のつく大学が2校あります。それは、マハーチュラロンコーンラージャヴィドゥチャラヤ仏教大学（Mahachulalongkornrajavidyalaya University or MCU、以下、マハーチュラ仏教大学と略す）とマハーマクットラージャヴィドゥチャラヤ仏教大学（Mahamakut Buddhist University or MBU、以下、マハーマクット仏教大学と略す）です。両校とも僧侶のための教育機関が前身となっています。

マハーチュラ仏教大学は1887年に僧侶の高等教育機関としてワットマハータート（王宮前広場向かいにある）に設立されました。当初は仏教のみのカリキュラムでしたが、次代の要請もあり、地方の教育向上に寄与するため、教育学などの科目の拡充もされ、1947年、大学に昇格しました。一方、マハーマクット仏教大学は1893年に同じく僧侶の高等学術機関としてバヴォンニウエート寺院の境内に設立されました。こちらも数度カリキュラムの拡充を行い、1946年、大学として認定されました。

第1-2回の記事にも紹介しましたように、タイ仏教にはマハーニカーヤ派とタンマユット派の2つの宗派があり、マハーニカーヤ派が多数派です。タンマユット派は19世紀の初めにバヴォンニウエート寺院の僧侶であったラーマ4世（モンクット王）が、仏典に則ったより厳しい戒の実践を目指して興した派です。マハーチュラ仏教大学はマハーニカーヤ派に所属し、マハーマクット仏教大学がタンマユット派の大学となっていますが、両者が対立しているというわけではありません。

ラーマ4世は、西洋列強の東南アジアに対する文化的政治的脅威に対して、タイの精神的安定には、仏教もより教義的合理性を求めべきだとして、キリスト教宣教師にタイ国内のキリスト教布教を認める代わりに、自らの家庭教師をさせて西洋の最新事情を学ぶ一方、仏教に関する多数の学術書を著述されました。特にパーリ語文法に関する著述が有名で、現在でもテキストとして使用されています。

双方の大学とも当時は僧侶向けとして設立された大学でしたが、現在は一般向けコースやインターナシヨ

ナルコース（英語による授業）も開設され、より仏教を学ぶ門戸を広げるとともに、国際化と仏教の学術センターの地位を確立しようと、さまざまな学術会議も行われています。学生もタイ人だけでなく周辺国のラオス、カンボジア、遠くはインドやバングラデシュ、スリランカ、ロシア、ヨーロッパからの留学生もいて国際色豊かです。また、両者の大学は、宗派を問わず、異なる宗派の学僧も受け入れています。まさに、宗派の違いを超える仏教教育制度であると思います。

マハーチュラ仏教大学は、タイ全国14カ所に地方キャンパスがあり、メインキャンパスはアユタヤ県ワノイ郡に位置しています。一方、マーマクット仏教大学は、7カ所に地方キャンパスがあり、第9の新キャンパスをナコンパトム県（バンコクの近く）サラヤに建設しています。完成後、メインキャンパスとして移校する予定になっています。



マハーチュラロンコーンラーヂャヴィドゥヤラヤ仏教大学



マーマクットラーヂャヴィドゥヤラヤ仏教大学

プラチャッポン (Phramahāchatpong Katapuñño)
大学院仏教学専攻博士後期課程3年

～コラム「日本文化と仏教」⑫～

『梁塵秘抄』の博徒の守り本尊

仏教会会員 作家 永田道子

平安時代、宴会で女芸人などが鼓の伴奏で節をつけて歌う歌を今様（いまよう）といった。現代でいえば歌謡曲の流行歌である。

後白河院（1127～1192年・在位1155～1158年）は、ひよんなことから帝位に就いたせいか、治政者の自覚などかけらもない軽薄な人で、自分の都合でこころ態度を変えて周囲をふりまわすので、源頼朝が「日本国第一之大天狗」と罵ったほど、自己中心のしたたか者だったが、その後白河院が少年時代から今様の熱狂的マニアだった。身分賤しい女芸人を師匠と仰いで習得に余念がなく、しょっちゅう御所に彼女らを呼び入れて、ともに何日もぶつつづけで歌い明かした。歌いすぎて喉が破れて血が噴き出たというから、度を越している。

そんなオタクが編纂した今様のテキストが『梁塵秘抄（りょうじんひしょう）』である。梁塵とは、昔の中国の名歌手が歌うと梁（はり）に積った塵が感動して舞い上がったという故事から、音楽や歌声が美しいのを賞賛することをいう。

集中でいちばんよく知られている歌は、
「遊びをせんとや生まれけむ 戯れせんとや生まれけむ 遊ぶ子どもの声きけば わが身さへこそゆるがるれ」

子供というのはきっと、楽しく歌い興じるためにこの世に生まれ出てくるのであろうな。声を聞いていると、大人の自分まで思わずウキウキして手足が動きだしてしまうことよ。

というのが本来の意味だが、後世、上の二句だけ引いて、「人間はただ遊びや戯れをするために生まれてくるのであって、他に目的などないのだ。なんのために生きるかなどと思ひ悩むのは愚かしいことだ」という、ある種のひらきなおりに使われることが多い。後白河院のことだから、草場の陰から、したり顔でほくそ笑んで見ていることであろうが。

しかし後白河院はその反面、仏教の熱心な保護者でもあったから、『梁塵秘抄』には仏教にちなむ歌も数多く収められている。

院自らも今様に熱中してきた半生をふりかえってさぞかし輪廻の業になるであろうと反省するものの、その舌の根も乾かぬうちに、法文（仏教歌）は聖教の文となんら違いはない、世俗歌謡も煎じつめれば転法輪、「今様即仏道」とひらきなおっている。当時の文芸者に共通する自己弁護の常套文句でもあるのだが、その一例。

「狂言綺語（きょうげんきぎょ）のあやまちは ほとけを讃（ほ）むるを種として 匱（あら）き言葉も いかなるも 第一義とかにぞ帰るなる」

むろん、いたってまともな釈教歌もある。

「法華経八卷（やまき）は一部なり 拡げて見たれば あな尊（たふと） 文字ごとに 序品第一より受学無学作礼而去（じゅがくむがくさらいにこ）に至るまで 読む人 聞く者 みなほとけ」

文学的で美しい歌といえば、

「仏は常にいませども 現（うつ）ならぬぞあはれなる 人の音せぬ暁に ほのかに夢に見え給ふ」

参籠して明け方、夢か現かの狭間に、ほとけの姿がうっすら見えるという幻想的なイメージ。これも有名な歌である。

「ほとけも昔は人なりき われらも終（つい）には仏なり 三身仏性 具せる身と 知らざりけるこそ あはれなり」

この歌も当時からよく知られていたようで、『平家物語』に、白拍子の祇王が平清盛の寵愛が他の女に移ったのを嘆き、「仏も昔は凡夫なり われらも終には仏なり いづれも仏性具せる身を 隔つるのみこそ悲しけれ」と泣く泣く歌って身を隠したという話があるが、明らかにこれの替え歌である。

狂言綺語や今様が即仏道修行との伝でいえば、博打（ぼくち）もまた仏道修行の一環といえないこともないわけで、博打打ちの歌もある。

「拘尸那城（くしなじょう）のうしろより ぢうの菩薩ぞ出でたまふ 博打の願いを満てんとて 一六三とぞ現じたる」

拘尸那城のうしろから十の菩薩がお出ました。博徒の願いをかなえてくださるために、一・六・三の賽の目で。

拘尸那城は中インドの末羅国の都市クシナガラのこと、釈迦は城外の跋提河西岸の沙羅林で入滅したとされる。くしなと読んで九・四・七、ぢうの菩薩の「ぢう」は十。九と一、四と六、七と三、それぞれ足して十になる。一と六と三も、合計すると十。十地の菩薩が博打うちの守り神というわけだが、拘尸那城のうしろから、こそとお出ましになるあたり、菩薩の面目丸つぶれの感がある。

「くしな」はまた「九品」とも掛け、九品の行業、つまり極楽浄土に往生するための修行の意味もある。

もう一つ、博徒の息子をもった母親の歌。

「わが子は二十（はたち）になりぬらん 博打してこそ歩（あり）くなれ 国々の博党（ばくとう）に さすがに子なれば憎かなし 負かいたまふな 王子の住吉 西宮（にしのみや）」

二十歳になったわが息子は博打打ちになってあちこち渡り歩いているそう。しょうもないどら息子だけでも、我が子だから憎めない。靈験あらたかな住吉と西宮の神様、どうかお願いします。諸国の博徒どもに負けさせてくださいませぬ。

なんとも切ない親心ではないか。懲らしめて改心させてくれというのではないのだ。

ついでに、これまた、どうしようもないぐうたらの子供が三人もいる老いた母の嘆き。

「嫗（おうな）の子どもの有様は 冠者（かじゃ）は博打の打ち負けや 勝つ世なし 禪師はまだきに夜行（やこう）好むめり 姫が心のしどけなければ いとわびし」

この婆さんの子供三人のありさまといえば、長男の冠者は博打打ちで勝ったためしが無い。次男坊は口減らしのために寺に入れたが、まだ年端もいかぬのに、夜遊び三昧。おまけに娘は男にだらしない尻軽ときているのだから、とてもじゃないがやりきれない。

なまじ、まっとうな歌よりも、こういうほうがはるかに面白い。まさに俗謡、歌謡曲である。

当時はどんな節で歌っていたのか。身ぶり手ぶりも交えたのか。想像するしかないのが残念だが、ただ、宮中で歌われるのはいかがなものか。後白河院という人はやはり希代の変人である。

《会員だより》 ～落語と仏教～

仏教会会員 落語家 春風亭伝枝

昨年5月に真打に昇進させていただき、その節には印哲の恩師・先輩方には大変お世話になりました。東洋大卒業後、何の考えもなく飛び込んだ落語界でしたが、思いもかけず落語と仏教との関わりは深いものでした。

江戸初期、日本で初めて笑話集「醒睡笑」を書いたのは浄土宗の僧侶であった安楽庵策伝でした。庶民を相手に、笑い話をふんだんに取り込んで説法をしていた策伝、このことから「落語の祖」とも言われています。「醒睡笑」には1309話の小咄が収められており、現在も盛んに演じられる「子ほめ」「平林」などの原話も見られます。ちなみに策伝の俗名が平林だそうで。また、落語を演じる舞台のことを「高座」と言いますが、これはもちろんお寺から出た呼び名で、時宗の踊念仏や真宗の節談説法が大衆芸能の原点であるという説もあります。このあたりの話はインターネットでも散見できますし、関山和夫先生が深く研究されていますので興味のある方はぜひ一読を。

落語の中には庶民と仏教との関わりの深さが多く見られます。例えば有名な「寿限無」。名前をつけるのはお寺の和尚さんです。“五劫の擦り切れ”“海砂利水魚”“水行末雲来末風来末”といった発想も非常に仏教的です。寿限無の結末は、井戸にはまって助けを呼んでいるうちに名前が長すぎて溺れ死んでしまうというのですが、暗い噺になってしまうので最近ではこの部分はまず演じられません。これをやった場合は「長い名前はあだを成す」と一言添えてサゲることになっておりまして、執着はよい結果をもたらさないというブラックジョークに仕立てられていました。

禅宗のお寺を舞台にした「蒟蒻問答」、無住の寺に流れ者が蒟蒻屋の親父の斡旋で和尚として住み込みますが、ここに修行僧が現れて、蒟蒻屋と問答対決をするという噺。これは禅宗のお坊さんに見せても全く違和感がないようで、調べてみたらそれもそのはず、作者の二代目林屋正蔵はもと僧侶で、登場人

物の沙弥托善なる雲水の名はこの人の出家名でした。

残念ながら字数が埋まってしまったので、他の断はぜひ寄席にお運びになって聞いて下さい！最後に宣伝を。この度 CD を出しました。キングレコード「新宿亭砥寄席その参」KICH2603、全国 CD ショップ、オンラインショップにて発売中です。ぜひ断家の印税生活にご協力を(笑)。

(印哲94年度卒業生、本名・菅沼忠行)



～世界の般若心経が収録された DVD ができました～

仏教会会員 加藤悦子

平城遷都 1300 年の奉祝行事として開催された「国際法会」の記録 DVD が完成しました。昨年 8 月、アジア 9 カ国・地域出身の在日僧らが奈良に結集し、各国・地域の読誦法で仏法興隆と世界平和が祈られました。国内の寺院も 4 つの宗派が参加したこの法会は、大仏開眼以来の国際的な仏教行事となり、日本仏教界にとって刺激的な試みとなりました。

この行事は仏教会会員の加藤悦子が企画し、東洋大学の竹村牧男学長をはじめ、菅沼晃名誉教授ら多くの先生方と、仏教青年会・校友会からの多大なるご協力とご支援をいただき実現することができました。このたび記録 DVD の発行（2012 年 1 月 1 日予定）にあたり、感謝を込めて仏教会・仏青会員の皆様には先行予約（1 割引）を受付けます。

DVD の内容

①国際法会の記録は 127 分で、スリランカ・タイ・ベトナム・モンゴル・チベット・台湾・韓国・中国・日本の 43 種のお経（回向など含む）を収録。②すべての経題が画面上に表示されています。③パーリ語について、般若心経について、モンゴル仏教についてなど、8ヶ所に解説テロップ付き。④般若心経は、サンスクリット語・チベット語と、漢文のベトナム・台湾・韓国・中国・日本呉音（一般的な読誦）・日本唐韻（黄檗宗の読誦法）の 8 種の異なる読誦を収録。④漢文般若心経には、読誦法が習得できるよう 6 種すべてに読み方のテロップ付き。⑤DVD には国際法会の記録のほか、ゲストの外国僧のインタビュー集 10 分、シルクロード写真集 10 分（オリジナル曲付）も収録。

DVD の収益金は全額、日本を土台とした仏教国際交流の活動資金として使用されます。

ご予約は tennyodo@ac.auone-net.jp または 080 (5641) 1076 サンギーティの会 加藤まで。

一枚 3000 円→2700 円。「まいとりの」秋号を読んだとお申し出ください。 <http://michinori.hp2.jp>



《書籍・イベント情報》

○《書籍》

・『ブッダを知る事典』

菅沼晃・渡辺章悟/監修 (佼成出版社 4410円)

ブッダ(釈尊)は、どのように生き、いかなる真理に目覚め、私たちに何を伝えようとしたのか。「仏教誕生」の壮大なドラマを、豊富な辞典項目と詳しい解説でたどる仏教ガイド決定版。ブッダの真理をめぐる物語、部派・大乘の歴史と基礎知識、用語・高僧伝・宗派史などが一冊に。

・『葬儀と日本人一位牌の比較宗教史』

菊地章太/著 (ちくま新書 798円)

葬儀の原型は古代中国でつくられた。以来二千数百年、儒教・道教・仏教が混淆し、「先祖を祀る」という感情に収斂していく。位牌と葬儀の歴史を辿り、死生観を考える。

・『ことわざで学ぶ仏教』

勝崎裕彦/著 (NHK出版 740円)

仏教をめぐることわざは、日本人の庶民信仰と俳句・川柳などの庶民文化興隆の過程ではぐくまれた、きわめて多様で味わい深い内容を含んでいる。難解とされる仏教の教義や思想を日常生活に引き寄せ、時に笑いながら、時にうなずきながら学べる楽しい仏教入門の書。

・『ゴータマ・ブッダのメッセージ「スッタニパータ」私抄』

羽矢辰夫/著 (大蔵出版 2415円)

苦しみを減して安らぎを得る—ゴータマ・ブッダは、こころの成長を経て、この究極の目的を実現しました。『スッタニパータ』には、ゴータマ・ブッダのたどった道筋が素朴な表現で断片的に示されています。本書は現代の人々がゴータマ・ブッダの目覚めを指針(=メッセージ)として成長していけるように、それらの記述のあいだに橋を架ける試みです。

・『チベット密教 瞑想入門』

ゲシェー・ソナム・ギャルツェン・ゴンタ/著 (法蔵館 3570円)

1996年金花舎発行の『チベット密教の瞑想法』を改訂増補したもの。増補分は巻末から左開きにガンテン・ラギヤマのグル・ヨーガほかの読誦用経典を蔵文・カナ読み・和訳で収録。

・『マイ仏教』

みうらじゅん/著 (新潮新書 714円)

人生は苦。世の中は諸行無常。でも、「そこがいいんじゃない!」と唱えれば、きっと明るい未来が見えてくる。住職を夢見ていた仏像少年時代、青春という名の「荒行」、大人になって再燃した仏像ブーム。辛いときや苦しいとき、いつもそこには仏教があった。グッとくる仏像、煩惱まみれの自分と付き合う方法、地獄ブームと後ろメタファー、ご機嫌な菩薩行…。その意外な魅力や面白さを伝える、M・J流仏教入門。

○《イベント》

・立正佼成会開祖記念館「お釈迦さまの生涯とゆかりの地」展

東洋大学名誉教授・森章司先生(東洋大学仏教会会員)が代表をつとめられる「釈尊伝研究会」の企画で、「原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究」の研究成果に基づいた展示会です。なお彫刻家中村晋也氏(文化勲章受章者)のご協力により、奈良薬師寺大講堂に奉納された釈迦十大弟子像の中、阿難像・摩訶迦葉像・舍利弗像を展示しています。

日時: 10/1(土)~2/15(水)

会場: 立正佼成会開祖記念館 特別展示室(法輪閣1階)

住所: 杉並区和田2-8-36

※入場無料。なお不定期に

休館いたしますので、事前

にお問い合わせになって

お出かけください。展示内

容の詳細を記した小冊子が

ございます(無料)。お

求めの方は開祖記念館の

受付(常設展示の方にあり

ます)に申し出てください。

開祖記念館事務所 TEL:03-5341-1004,

(<http://www.sakya-muni.jp/news/2011/10/post-22.html>)



・東京国立博物館 特別展「法然と親鸞 ゆかりの名宝」

法然没後800回忌、親鸞没後750回忌を機に、両宗派からの全面的な協力を得て、法然と親鸞ゆかりの名宝を一堂に集めた史上初の展覧会です。浄土教の二大宗祖である二人の考え方や人物像について理解を深めることができる貴重な機会です。

日時: 10/25(火)~12/4(日)

9時30分~17時(金曜は20時まで、祝祭日は18時まで)

会場: 東京国立博物館 平成館

観覧料: 一般1500円、大学生1200円 ※休館日は月曜です。

・金沢文庫 特別展「愛染明王 愛と怒りのほとけ」

愛染明王の仏像や仏画の名品を紹介し、文献からもその姿の秘密に迫りつつ、密教修法の実態と歴史を辿る。

日時: 10/15(土)~12/4(日) 9時~16時30分

観覧料: 一般600円、学生400円

住所: 神奈川県横浜市金沢区金沢町142(京浜急行「金沢文庫」駅下車、徒歩12分)

※休館日は毎週月曜と11/24(木)です。

・日本仏教心理学会 第3回学術大会

日時: 2011年12月10日(土) 10:00~20:00

場所: 立正大学 11号館(総合学術情報センター)

〒141-8602 東京都品川区大崎4-2-16

大会テーマ: 「混迷する現代社会 - 学会・学会員には何ができるか」

基調講演: 上田紀行、東京工業大学准教授 講題: 「慈悲の怒り - 仏教と心理学の役目」 主な著書: 『がんばれ仏教』、『生きる意味』、『ダライ・ラマとの対話』、『自殺社会』から「生き心地の良い社会へ」、『慈悲の怒り - 震災後を生きるマネジメント』など多数。

～ 東洋大学仏教青年会・仏教会、今後の予定 ～

※勉強会についてのお問い合わせは下記の連絡先をお願いいたします。(会員は無料で参加できます。)

《定例研究会》

毎月一回、打ち合わせ後に「大智度論を読む」を行います。

10月26日(水)、11月30日(水)

12月22日(木) 定例研究会兼忘年会

14時40分～16時10分

会場：文学部会議室

《語学勉強会》

○仏教漢文講読会

講師：橘川智昭

会場：5303教室

日時：隔週木曜4限

『法華経』を読みながら漢文の読み方と仏教の思想を学ぶ。

○サンスクリット文献勉強会

講師：出野尚紀

日時：隔週水曜日の6限

内容：『ブッダチャリタ』を読みます。初心者大歓迎です。

○チベット文献講読

講師：石川美恵

日時：隔週月曜 18:30～19:30

内容：ツォンカパの『ラムリム』「菩提心の儀軌」の章を読みます。チベット語初心者も歓迎です。

会場：インド哲学科共同研究室

参加希望者は石川<danakoshajp@yahoo.co.jp>までご連絡下さい。

《各種研修》

○インド独立の闘士たちの足跡を巡る

11月下旬

新宿の中村屋など

(引率:宮本久義先生)

○2011年 東洋大学仏青・仏教会忘年会

日時：12月22日(木)

18時30分～20時30分

場所：仏教伝道協会ビル内

レストラン「菩提樹」

<http://r.gnavi.co.jp/a076100/>

アクセス：都営地下鉄三田線、都営地下鉄浅草線・三田駅・A9番出口より徒歩2分

：JR 田町駅 三田口(西口)より徒歩8分

<http://www.bdk-jp.org/bdk/access.html>

今年度は、小峰先生監修の映画DVDなどの景品が当たるピンゴ大会を予定しております。皆様、お誘い合わせの上ぜひご参加ください。

*<語学勉強会>は資料等の準備がありますので、末尾に記載した仏青会長、または仏教会事務局長宛まで、あらかじめご連絡下さい。

※随時会員を受け付けています。入会希望者は下記までご連絡下さい。会員規約・活動内容・受付手続きなどの詳細はホームページ (<http://www.toyo-yimba.org>) をご覧下さい。また、紹介したい行事や掲載したい記事などがございましたら、このアドレスまでご一報下さい。

編集責任者：文学部インド哲学科3年 鈴木伸幸

東洋大学仏教会

卒業生、一般：年会費3000円、特別賛助一口5000円

東洋大学仏教会事務局長 岩井昌悟

〒112-8606 東京都文京区白山5-28-20

東洋大学インド哲学科第8研究室気付

Tel: 03-3945-7393(-7357) E-mail: tba.bussei@gmail.com

東洋大学仏教青年会

学生：年会費1000円

東洋大学仏教青年会会長 藤森晶子

db1000016@toyo.jp

URL: <http://www.toyo-yimba.org>